

## フランソワーズの系譜

成 沢 広 幸

「失われた時を求めて」<sup>1)</sup>の中にフランソワーズという作中人物が登場する。彼女は最初、主人公の母方の里コンブレの縁戚レオニー伯母に仕えていたのだが、彼女の死後、主人公の家に入った女中なのである。しかし単なる召使という類型を超えて非常に複雑でまた興味深い人物として描かれている。彼女は、語り手自身の言葉をかりれば主人公の一家と「共生関係」にある。

(…), Françoise vivait avec nous, en symbiose; c'est nous qui, avec nos vertus, notre fortune, notre train de vie, notre situation, devons nous charger d'élaborer les petites satisfactions d'amour-propre dont était formée (…) la part de contentement indispensable à sa vie<sup>2)</sup>.

しかし、その存在は、例えば芸術創造・ディレクタント・社交界・同性愛・性愛・ブルジョワ・貴族などといった諸主題を展開するための源となる主人公、スワン、ゲルマント公爵夫人、シャルリュス、アルベルチヌス、ヴェルデュラン夫人、サン・ルーなどといった主要登場人物に比べて二次的であるとされて<sup>3)</sup>、これまでの研究でもいわば表面的に触れられるくらいで、「失われた時を求めて」の中で彼女が果たしている役割について十分な照明が当てられて来たとは言えない。本稿は、従来の認識に加えて、新たな照明の中にフランソワーズを浮かび上がらせようとするものである。

ところで一部前述したように、ブルーストの諸テキストに通底するいくつかの主題といったものが存在する。ブルーストの全テキストとは言わないまでも、例えば愛と死・背徳・芸術・友情・社交界・スノビズムと、思いつくままに挙げただけでもいくつかあるこうした主題が様々なヴァリエーションを奏でながら初期作品から「失われた時を求めて」に至るまでブルーストの諸テキストを横断していくのを見ることができるだろう。そして最終的にはそうした主題は「失われた時を求めて」の中で壮麗な交響楽となって響きあうのだが、フランソワーズは一見したところ、どの主題に属すかわからない、というよりもむしろ彼女は「失われた時を求めて」において初めて出現した独立的なもののように見える。ある批評家が言うように「彼女は厳密にいえば、

分類不可能なのである」<sup>49</sup>。しかし、主人公の生涯に大きな比重を占めることとなる登場人物が初めてここで出現したという事実は、決してなごびりにされてよいことではない。勿論、彼女の召使という身分に注目して諸テキストとの連続性を探ることは可能であるが「ジャン・サントウイユ」その他のテキストの中の、例えばエルネステューヌ、フェリシー、カトリーヌ、オーギュスタンといった召使達ははるかに出現回数が少ないばかりか、あまりにも個性のない存在なので、そうした召使達との比較はますますフランソワーズの独自の存在を印象づけるだけであり、したがってほとんど無意味でさえあると思われる。また、「失われた時を求めて」では主人公の家に複数の召使が存在することが明らかになっているが<sup>50</sup>、彼らはその名さえわれわれには知らされず、全く個性をうばわれた存在となっている。つまり彼女の存在はテキストの連続性という観点からは説明できないので、このことも彼女についての言及が少ないことの原因の一つかもしれない。

さてこうして物語の中に突然に場所を占めた彼女はそこではどのような関係の中に置かれているのだろうか。「コンブレーとサンタンドレ・デ・ジャンの化身、フランソワーズ」<sup>61</sup>と、ある批評家は簡潔に定義するが、これがフランソワーズ解釈の公約数であるとおもわれる。サンタンドレ・デ・ジャンとは、コンブレー近郊の古い教会、具体的にはその浮き彫りの群像のことで、語り手はしばしばこれについて触れている。

Souvent aussi nous allions nous abriter, pêle-mêle avec les saints et les patriarches de pierre sous le porche de Saint-André-des-Champs. Que cette église était française ! Au-dessus de la porte, les saints, les rois-chevaliers une fleur de lys à la main, des scènes de noces et de funérailles étaient représentés comme ils pouvaient l'être dans l'âme de Françoise. Le sculpteur avait aussi narré certaines anecdotes relatives à Aristote et à Virgile, de la même façon que Françoise à la cuisine parlait volontiers de saint Louis comme si elle l'avait personnellement connu, (...) <sup>71</sup>.

と、このように彼女とフランスとの同質性について早くも言及がなされている。要するにサンタンドレ・デ・ジャンとは、良かれ悪しかれ中世以来の連綿たる伝統を持つフランスという意味を持ち、フランソワーズはそうした象徴的な心性を持つ者として描かれているのである<sup>81</sup>。そして彼女の行動を律しているのは「les lois enseignées à Saint-André-des-Champs」であることが度々強調される。

Déjà la nature familiale de ces visites que faisait Françoise ajoutait à mon agacement d'être privé de ses services, car je prévoyais qu'elle

parlerait de chacune comme d'une de ces choses dont on ne peut se dispenser, selon les lois enseignées à Saint-André-des-Champs<sup>9)</sup>.

こうした彼女について語り手が抱く印象は次のようなものである。このような考察の対象となるフランソワーズを、語り手は単なる召使としては見ていないことは明らかである。それどころか、語り手は自分に精神的に近い存在としてフランソワーズを感じているといってもよい。

Mais devant la clarté de son regard, devant les lignes délicates de ce nez, de ces lèvres, devant tous ces témoignages, (...), on était troublé (...), et on pouvait se demander s'il n'y a pas parmi ces autres humbles frères, les paysans, des êtres qui sont comme les hommes supérieurs du monde des simples d'esprit, ou plutôt qui, condamnés par une injuste destinée à vivre parmi les simples d'esprit, privés de lumière, mais pourtant, plus naturellement, plus essentiellement apparentés aux natures d'élite que ne le sont la plupart des gens instruits, sont comme des membres dispersés, égarés, privés de raison, de la famille sainte, des parents, restés en enfance, des plus hautes intelligences, (...) <sup>10)</sup>.

ところでブルーストが、自分の書物の題名は勿論のこと、地名であれ人名であれ、固有名詞の創造や選択に非常に気を使ったということはよく知られているが、「フランソワーズ」という人名もまた、ブルーストのテキストにおいては偶然に選ばれたものではない。というのはこのフランソワーズという名前は主人公と恋愛関係にある女性の名として以前のテキストに現れているからであり<sup>11)</sup>、けっしてブルーストに無縁のものではなかったのである。さらにブルーストが彼女に語源的にはフランス人を表す名詞の女性形を充てたということもまた、ブルーストがフランソワーズを伝統的なフランスの化身として見ていたことを示す傍証となるだろう。ブルーストの主人公にとって非常に身近な存在であるとともに、伝統的なフランスを象徴する人物という二重の意味をこの「フランソワーズ」という名は担っているのである。

以上に述べたようなフランソワーズ解釈は「失われた時を求めて」、およびそれ以前のテキストから自然に取り出せ、かつ現在のところ彼女の包括的な性格についてはそれ以外の解釈は存在しないのだが、彼女の役割は、それだけでは部分的なものにとどまってしまうと思われる。したがって、いままでのフランソワーズ像を補完し、新

たな全体像を構築する解釈の可能性を探ることが本稿のめざすところである。

ところで、このようにブルーストあるいは主人公にとって大きな存在であるフランソワーズが、実際にはそのモデルとなった現実の幾人かの召使の特徴を付与されただけの、田舎の粗野で嫉妬深く残忍な料理女としてのみ描かれていたかもしれない、といえは奇異に聞こえるだろうか。実際、バルデッシュによれば、「まず草稿の中にあられたフランソワーズは、今日ブルーストの熱心な読者に多くの共感を喚びおこす非常に「農民的」で興味深く、やや不平家の「忠実な召使」というイメージにくらべて、はるかに洗練度が少なくて微妙な陰影は持たないものの、はるかに実際の諸モデルに近い登場人物なのである。この原フランソワーズは妬み深く意地悪で、卑俗な女である。(…)しかしフランソワーズが真に一個の「登場人物」となり、個性や特徴を獲得したのは、彼女が実際にはブルーストの見てきたような田舎の召使なのではなくて(…)「ボース平野の農婦」なのだということ、つまり、中世の彫像にあるような聖女が二十世紀初頭にそっくりそのまま現れたのだということをもブルーストが発見したときからなのである。」<sup>12)</sup>バルデッシュはこの「聖女」の創造的出自については述べていないが、フランソワーズが新たな可能性を帯びてブルーストのテキストに出現したときに彼女が付与されたこの部分、バルデッシュの言葉をかりればこの「聖女」的部分こそわれわれの解釈の鍵となるだろう。

※

※

※

世紀末に執筆の「ジャン・サントゥイユ」とラスキン翻訳以後に構想を絶えずひろげながら書きつがれてきた「失われた時を求めて」、この両テキストの間を、1903年の父親、そして1905年の母親の死亡というブルーストにとっての一大事件が引き裂いているのだが、この両テキストを両親、とりわけ母親の描き方について比較してみると、いちじるしい相違に気づかざるをえない。すなわち「ジャン・サントゥイユ」における両親は、伝記的にみてより実際の両親に近いことは他の人物や出来事や状況と同じだが<sup>13)</sup>、この問題にかぎれば、「失われた時を求めて」よりも複雑で興味深い関係の中におかれている<sup>14)</sup>。かれらが自分たちの息子を愛していることは勿論であるが、主人公に接する態度はなによりもまず命令的・権威的である。たとえば主人公がシャンゼリゼで初恋の女性と毎日遊ぶのを止めようとしていきなりその時間帯に家庭教師のところへ通わせるように決めてしまう。主人公は激しく抗議するが、結局両親に従わざるをえない。

(…), s'écria Jean avec fureur, (…), et saisissant la carafe d'eau qui était prête à table pour son déjeuner, il la jeta par terre où elle se brisa. (…)  
M. Santeuil (…)  
arriva. (…), et

Jean, au moment où son père le poussait en lui donnant des claques vers le cabinet noir, tomba dans une violente attaque de nerfs <sup>15)</sup>.

また、父親が有無を言わず主人公にリセの転校命令を出したときも同様で、このときは父親への激しい怒りとともに、上述の事件を「惹きおこした」母親への怒りもまた噴きおこされる。

Ah, c'est ici qu'un matin où, aussi débordant de tendresse pour sa mère qu'aujourd'hui, il s'était caché pour l'attendre, elle lui avait annoncé qu'au lieu d'aller aux Champs-Élysées il irait chez M. Jaconnier. Son malheur d'avoir des parents si cruels et qui le méconnaissaient à ce point (...), à tous moments ses larmes (...) recommençaient aussitôt à couler <sup>16)</sup>.

もう一例を挙げよう。主人公が友人のある貴族の家に晩餐に行くことを母親が、誤解から、激しく非難したあとの場面である。

Jean était devenu blanc, ses yeux s'étaient immédiatement cernés, il tremblait sur ses jambes qui, (...) tremblait maintenant sous lui comme les jambes d'un agneau malade. A vrai dire, il ne pouvait encore penser au sens des mots que venait de dire sa mère. (...) Alors, il regarda farouchement ses parents, mit les mains dans ses poches, s'arrêta un instant et dit: «Vous êtes deux imbéciles», sortit lentement, frappa de toutes ses forces la porte dont le verre appliqué au bois se brisa (...) <sup>17)</sup>.

このように主人公は一旦怒りに身をまかせ両親の不当な仕打ちを呪うのだが、やはり彼とても両親の行為は自分への愛情に基づいているのだということを、つまりたとえそれが誤解や無理解に基づくものであっても、その根底に存在する両親の愛情を疑ってはいない。要するに、主人公は自分の行動を後悔しつつ、両親のそうした誤解や無理解を憎むというアンビヴァレンツな関係の中にあるのである。これは心理的に当時のブルーストの状況といってもいいだろう。つまり、両親との葛藤を昇華しえなかった時代のブルースト自身の状況である<sup>18)</sup>。

ところが「失われた時を求めて」をみると、すでに序章「コンブレー」からして、

事情は全く変化している。「コンプレーにおける幼年時代の物語全体を通じて欠けている唯一のものは(…)少年と両親の関係の真摯な分析である。(…)事実ブルーストは、詩的ではあるが人を欺くあの後光(…)から、話者の両親を引き離そうなどとはただの一瞬も考えていない。」<sup>19)</sup>コンプレー以後でも、両親と主人公が激しく葛藤する場面は注意ぶかく削除され、両親は、相変わらずブルジョワ的な心性にひたりきっているものの、最早主人公に何かを強制的に命令する権利を放棄し、控え目に物語の背景になかば隠れるようにして、特に父親などはほとんど姿を見せない。上に挙げた「ジャン・サントゥイユ」の三つのエピソードの内、二つまでが削除されている。そのうえ最初のエピソードも決定的な変容を被っている。つまり初恋の少女に会い過ぎるといって彼女に会うことを禁じられるエピソードは「失われた時を求めて」では、主人公そのひとが彼女に二度と会うまいと決心するのであり、両親の関与は存在しないという風に変化しているのである。このように両親への、または両親による攻撃的な関与が控え目になっているのは、他のエピソードでも同様で、たとえば両テキストとも冒頭近くに位置する「おやすみのキス」のエピソード<sup>20)</sup>は「ジャン・サントゥイユ」では両親特に母親を屈伏させたという無邪気な勝利宣言にはかならないのだが、「失われた時を求めて」ではそうした屈伏が母親を一層老いさせ悲しませる原因となってしまったという悔恨のトーンに貫かれている。両親が問題となるとき、最早攻撃的な態度は見られず、むしろ両親を哀惜し、いとおしむ態度、さらには一種敬虔な態度さえ見られるといっても過言ではない。そうした例を二つほど挙げよう。二例とも母親とのヴェネツィア旅行に関係している。

(…), chaque fois que je vois le moulage de cette fenêtre dans un musée, je suis obligé de retenir mes larmes, c'est tout simplement parce qu'elle ne me dit que la chose qui peut le plus me toucher : «Je me rappelle très bien votre mère.»<sup>21)</sup>

Une heure est venue pour moi où (…), il ne m'est pas indifférent que dans cette fraîche pénombre, à côté de moi, il y eût une femme drapée dans son deuil avec la ferveur respectueuse et enthousiaste de la femme âgée (…), et que cette femme aux joues rouges, aux yeux tristes, dans ses voiles noirs, et que rien ne pourra plus jamais faire sortir pour moi de ce sanctuaire doucement éclairé de Saint-Marc (…), ce soit ma mère<sup>22)</sup>.

こうした変化の基底には両親の死という事実だけではなく、その意味の理解が必要であろう。たしかにブルーストは父親の死に際してアンナ・ド・ノアイユに、

(…) je me rends bien compte que j'ai toujours été le point noir de sa vie <sup>23</sup>.

と述べ、また母親の亡くなったときにロベール・ド・モンテスキューに宛てて、

Ma vie a désormais perdu son seul but, sa seule douceur, son seul amour, sa seule consolation <sup>24</sup>.

と書き送っている。だが、われわれがブルーストの罪悪感をはっきりと知ることができるのは、アンリ・ヴァン・ブラレンベルクという知り合いがその母親を殺害したことに衝撃を受けて新聞に書きおくれたエッセー「親殺しの孝心」の中においてである。ブルーストは其中で、自分を他人の相のもとに描くという常套手段<sup>25</sup>を弄しながら、次のような考察をしている。

« Qu'as-tu fait de moi ! Qu'as-tu fait de moi ! » Si nous voulions y penser, il n'y a peut-être pas une mère vraiment aimante qui ne pourrait, à son dernier jour, souvent bien avant, adresser ce reproche à son fils. Au fond, nous vieillissons, nous tuons tout ce qui nous aime par les soucis que nous lui donnons, par l'inquiète tendresse elle-même que nous inspirons et mettons sans cesse en alarme<sup>26</sup>.

このように自分の罪を目の当たりにしたブルーストが、作品の中で両親に一種の「聖化」をはどこし、言わば批判外の存在とすることによって、彼らの愛情に植しなない、あるいはそうしようとしても出来なかった自分の罪悪感を祓おうとしたことは十分に考えられる<sup>27</sup>。「アンリ・ヴァン・ブラレンベルクが母を殺したのと同じく、ブルーストは自分の母をそれと同じくらい確実なやり方で死に追いやったのだという事実に気づいたのだった。(…)「親殺しの孝心」を書いた夜は、彼の生涯の転回点であった。彼ははじめて自分の咎を自覚したのであり、それゆえ彼はその後、母を許すことができたのだった。(…)彼にとって母の死はひとつの頂きをあらわし、そこにこそ生涯の分水界が位置していたのだった。」<sup>28</sup>

それでは家庭内における葛藤は「失われた時を求めて」では描かれていないのだろうか。ここでフランソワーズが問題となる。一般的に「失われた時を求めて」では存在するが、それ以前のテキストでは展開されていない主題は、大別してブルーストの創造的深化が不足しているものと、心理的抑制が働いているものとのふたつになるが<sup>29</sup>、フランソワーズの場合は明らかに前者の系統に属すると思われる。フラン

ソワーズの担うべき役割がブルストに理解されたのは彼が両親の死の意味を理解したとき（ペインターによれば、前述のエッセーを書いた1907年初め）であると考えていいだろう。背景にしりぞいて、「ジャン・サントゥイユ」に比べれば最早影のように痩せ細った両親にかわって今度はフランソワーズが主人公の生活の前面に登場し、大きな場所を占めるようになり（Et puis parce qu'à force de vivre de ma vie, elle...）<sup>30</sup>、ついには、主人公の芸術創造の補助者としてさえその存在が予告されるようになる。

Et, changeant à chaque instant de comparaison selon que je me représentais mieux, et plus matériellement, la besogne à laquelle je me livrerais, je pensais que sur ma grande table de bois blanc, regardé par Françoise, comme tous les êtres sans prétention qui vivent à côté de nous ont une certaine intuition de nos tâches (...), je travaillerais auprès d'elle (...)<sup>30</sup>.

このように語り手さえも、もはや単なる召使として見てはいないフランソワーズ、語り手があたかも両親に対してそうするような「憐憫に根ざした、もっとも強い種類の愛情」<sup>32</sup>を抱いているフランソワーズは、いわば両親の役割の一部を引き受けるようになっていく。そして主人公と葛藤を引き起こしかねない場面を引き受けるのだ。そうすることによってフランソワーズはバルデッシュの言う「原フランソワーズ」からの脱出を果たしたといえる。というのも、バルデッシュは「原フランソワーズ」のマイナス面は、ブルストの作中人物創造法のひとつである二分法によって<sup>33</sup>、新たに創造されたフランソワーズの娘に引き継がれたとのべているからである。つまり「原フランソワーズ」は、サンタンドレ・デ・シャン的な象徴性を持つ「現フランソワーズ」と卑俗な面が強調された「フランソワーズの娘」とに分化したのである<sup>34</sup>。

そして今やフランソワーズは主人公の不興を意に介せず彼の生活に入り込むようになる。たとえば、主人公がまだアルベルチヌと同棲する前、主人公を訪ねてきた彼女についてフランソワーズは、

Monsieur ne devrait pas voir cette demoiselle. Je vois bien le genre de caractère qu'elle a, elle vous fera des chagrins<sup>35</sup>.

と、忠告というより、一種の禁止命令を言いわたす。確かに表面的にみればこれは召使の単なる忠告であるかもしれない。だがフランソワーズ出現の大きな心理的契機として両親の死を考えるものにとっては、こうしたフランソワーズの発言の裏に両親の



口吻を感じとることは容易である。だがこうした命令が有無を言わさず両親の口から出たのであれば、主人公は結局のところ強制的にそうした命令に服さざるをえない状況に追い込まれ、そしてそれは遅かれ早かれ「ジャン・サントゥイユ」でみたような後悔の念・罪悪感となって残るかも知れない両親への激しいアンビヴァレンツな感情を発生させざるを得ないことは容易にみてとれる。先ず両親を非難し、ついでそうした非難が自分に反射して罪悪感を生むという悪循環を断ち切るために利用されたのが、否もそもそのことを目的の一部として含んで創造されたのが、フランソワーズという登場人物だったのではないだろうか。相手が彼女ならその忠告なり命令なりを、たとえそれが正当なものであっても平気で無視し、さらには挑発的な言動を弄して結局は自分が傷ついても、相手が両親ではないという事実は主人公にトラウマを与えるべくもなく、ましてや罪悪感などは問題にさえならない。実際、ここの例でも主人公はフランソワーズの命令には少しも従う気持ちがないのだが、結局はフランソワーズの直観が正しかったことは周知の通りである。

こうしたフランソワーズの忠告・命令・干渉は物語が進むにつれて多くなり、特にアルベルチヌ関係の物語では顕著である。いくつか例を挙げよう。まだ同棲前、アルベルチヌが主人公を訪ねてきて、二人がベッドで戯れていたとき、フランソワーズは突然部屋に入ってきて、彼らを恥じいらせる。

Comme elle (Albertine) finissait cette phrase, la porte s'ouvrit, et Françoise portant une lampe entra. Albertine n'eut que le temps de se rasseoir sur la chaise. Peut-être Françoise avait-elle choisi cet instant pour nous confondre, étant à écouter à la porte ou même à regarder par le trou de la serrure. (...) En ce moment, tenant au-dessus d'Albertine et de moi la lampe allumée qui ne laissait dans l'ombre aucune des dépressions encore visibles que le corps de la jeune fille avait creusées dans le couvre-pieds, Françoise avait l'air de la «Justice éclairant le Crime»<sup>36)</sup>.

また、隙さえあれば主人公とアルベルチヌとの仲を裂こうと心に決めている。

Elle (Françoise) n'osait pas encore entrer en guerre contre elle (Albertine), lui faisant bon visage, et se faisait mérite auprès de moi des services qu'elle lui rendait dans ses relations avec moi, pensant qu'il était inutile de me rien dire et qu'elle n'arriverait à rien, mais à l'affût d'une occasion; et si jamais elle découvrait dans la

situation d'Albertine une fissure, se promettait bien de l'élargir et de nous séparer complètement<sup>37</sup>.

あるいはあたかもフランソワーズが主人公に一種の復讐をしているかのようにアルベルチーヌの不実を示す数々の事実を指摘して主人公が苦しむのを見て満足するという一種凄惨な状況さえ出現するようになる<sup>38</sup>。そして、語られているかぎり主人公の生涯最大の悲劇ともいえるアルベルチーヌの出奔を彼に告げる残酷な役割もまたフランソワーズのものである（«Mademoiselle Albertine est partie!»<sup>39</sup>）。さらには彼女の監視癖もつり、たとえば主人公を訪ねてきた女性たちと主人公の会話を盗み聞きしたり、あるいは部屋をかたづけるとなふりをしてなかなか主人公たちの所から離れずに、主人公の鬘を整える。

Elle (Françoise) ne perdait pas ses défauts pour cela. Quand une jeune fille venait me voir, si mal aux jambes qu'eût la vieille servante, m'arrivait-il de sortir un instant de ma chambre, je la voyais au haut d'une échelle, dans la penderie, en train, disait-elle, de chercher quelque paletot à moi pour voir si les mites ne s'y mettaient pas, en réalité pour nous écouter<sup>40</sup>.

ここに、あまりにも優しく強い愛情で結ばれた母子関係における、母親の嫉妬と独占欲の反映を見てとるのはそう難しいことではないだろう。事実（これは弟ロベールの場合であるが）ブルースト夫人は、女友達をうしろに乗せていてオートバイ事故を起こした息子のもとに駆けつけたとき、息子の傍らにいる彼女を平然と無視して、息子に向けられる愛情の排他性（ブルースト自身の言葉をかりれば「見たくないものは見ないという特別な才能」<sup>41</sup>）を暗黙裡に、だが毅然と主張したことがあった。彼女にとっては *mon autre loup* にすぎないロベールに対してさえこうした排他的な愛情をあらわしたのであり、*mon petit loup*<sup>42</sup>であるマルセルに対してはさらに激しい感情を抱いていたと考えるのは自然である。「彼が病気になる度過ぎた寛大さを見せた母もやはり、彼が健康になり社交界に出入りし、友人と交際し、そうすることによって家庭から自由に振舞うのを見ると一種の嫉妬を覚えるのであった。（…）彼女の嫉妬はあらゆる種類の制限や不満という形であらわれたが、それらはすべて十分に裏付けのあるものだったとはいえ、もしマルセルが病床についておれば、つまり、彼が安全な場所にいるときには決して彼女の心に浮かばないような種類のものでは。」<sup>43</sup>

もっとも一種の親代わりとか監視癖とかは、召使に普遍的とはいわないまでも、決して珍しいことではないかも知れない。確かに「失われた時を求めて」をこれだけ独

立的なテキストとして扱えばそう考えても不当ではないだろう。しかし本稿のように、「失われた時を求めて」をブルーストの諸テキストとの関連でみた場合、両親あるいは肉親以外でこうしたいわば負の役割を担った主人公に身近な存在はフランソワーズが初めてであり、それ以前の諸テキストにおける召使たちは単なる類型の域を出ていない。だから問われるべきは、何故「失われた時を求めて」でそうした役割が初めて出現したのかであって、召使の一般的な性格なのではないのである。また、一種の親代わりとか監視癖とかをたんにフランソワーズはそういう「性格」なのだからといって説明することは、問題を、つまり作品の生成論を人物論に還元してしまうことになる。問題は、何故フランソワーズの担っているような役割が「失われた時を求めて」で初めて出現しなければならなかったかであって、フランソワーズの性格論なのではない。本稿ではその理由を両親の死による罪悪感によって、葛藤を引き起こす場面から両親を引きはなし、一種の「聖化」を施すことで、両親の呪縛から逃れようとしたのではないかというところに求めた。従来、両親とくに母親の死は、それによって「ソドムとゴモラ」すなわち作品への同性愛の決定的な出現に道を開いたということが強調されてきたが、フランソワーズという作中人物もまた両親の死が存在しなければ、たんに（バルデッシュ風にいうと）「原フランソワーズ」という粹にとどまり、決して主人公とアンビヴァレンツな面も含む、真の関わりを持たない存在に終わってしまったと思われる。両親の死を代償としてフランソワーズは真にブルースト的な作中人物として生まれかわったのである。

## 注

- 1) 「失われた時を求めて」(以下 *Recherche* と略すことがある) のテキストはプレイヤード旧版を使用 (Marcel PROUST, *A la recherche du temps perdu*, texte établi et présenté par Pierre CLARAC et André FERRE, Bibl. de la Pléiade, 3 vol., Gallimard, 1954.) 引用文の指示頁で I・II・III とあるのはプレイヤード版の巻を示す。なお *Recherche* の井上究一郎氏邦訳を参照・引用させていただいた。他のプルーストのテキストもすべてプレイヤード版によった。  
*Jean Santeuil*, précédé de *Les Plaisirs et les jours*, texte établi par Pierre CLARAC et Yves Sandre, Bibl. de la Pléiade, Gallimard, 1971. 及び, *Contre Sainte-Beuve*, précédé de *Pastiches et mélanges*, et suivi de *Essais et articles*, texte établi par Pierre CLARAC et Yves Sandre, Bibl. de la Pléiade, Gallimard, 1971.
- 2) *Recherche*, II, p.19.
- 3) たとえばバルデッシュは次のようにのべている。「Tout ce qui est facile au romancier, tout ce qui plaît au public et dont Proust a en lui l'instinct, la tante Léonie, Françoise, Eulalie, le curé, la sortie de la messe à Combray, c'est à ses yeux une matière délicieuse, mais secondaire. » (Maurice BARDECHE, *Marcel Proust romancier*, Les Sept Couleurs, 1971, t.1, p.271.)
- 4) J. Van de GHINSTE, *Rapports humains et communication dans "A la recherche du temps perdu"*, Nizet, 1975, p.62.
- 5) Cf. *Recherche*, II, pp.16-17.
- 6) Jean-Yves TADIE, *Proust et le roman*, Gallimard, 1971, p.230.
- 7) *Recherche*, I, pp.150-151.
- 8) 「良かれ悪しかれ」というのは、サンタンドレ・デ・ジャン的という形容が別に「正」の方向しか持たないとき以外は使われないとは限らないからである。語り手は、第一次大戦に自分が従軍できるようにと八方手をつくしているサン＝ルーについて語るなかで、そうした区別をやや諧謔をまじえながら述べている。「Mais il (Saint-Loup) (...), étant en cela (...) plus profondément français de Saint-André-des-Champs, plus en conformité avec tout ce qu'il y avait à ce moment-là de meilleur chez les Français de Saint-André-des-Champs, seigneurs, bourgeois et serfs respectueux des seigneurs ou révoltés contre les seigneurs, deux divisions également françaises de la même famille, sous-embanchement Françoise et sous-embanchement Morel, (...) . » (*Recherche*, III, p.739.)  
つまり、サンタンドレ・デ・ジャンには聖職者も含めて貴族・ブルジョワ・農民とい

うフランス人の総体が表されているのであり、フランソワーズは農民でありながら彼らと共通する象徴的な心性を持つ者として示されているのである。このことは 10) の引用をみれば一層はつきりと理解される。また、プレイヤード版巻末のインデックスによれば、サンタンドレ・デ・シャンについては十六回ほど語られるが、そのうち実に半数の八回がフランソワーズを同一文脈上に含んでいるのである。このこともまたサンタンドレ・デ・シャンとフランソワーズの「強迫的」とさえ言える結びつきを示してあまりあるものだろう。

9) *Recherche*, II, p.147.

10) *Ibid.*, I, p.650.

11) 例えば *Les Plaisirs et les jours* (1896) 所収の *La fin de la jalousie*, あるいは *Jean Santeuil* において、主人公の恋人はフランソワーズという名を持っている。

12) BARDECHE, *Op. cit.*, tome 1, pp.342-343.

13) こうした点については特に次の研究書を参照されたい。Mireille MARC-LIPIANSKY, *Naissance du Monde Proustien dans Jean Santeuil*, Nizet, 1974.

14) タディエはブルーストの作中人物創造法のひとつにふれて「Plus essentiel est le dédoublement subi, au cours de la genèse de l'oeuvre, entre personnages pourtant restés frères. (...) Mais l'exemple le plus frappant est le dédoublement de la mère de Jean Santeuil entre la mère et la grand-mère du narrateur, déjà pressenti dans l'article de 1907, *Une Grand Mère*.」(*Op. cit.*, pp.217-218.) と述べている。このように「ジャン・サントゥイユ」の母親は「失われた時を求めて」では母親と祖母に二分されたのだが、そして「失われた時を求めて」では母親よりも祖母の方に描写の比重が偏っているのだが、基本的には両者とも「ジャン・サントゥイユ」の母親の断固たる積極性は持ちあわせない静態的で「無害」な存在となっている。本質的に両者は同質といえるので、したがって主人公に対する彼女たちの態度もまた同様である。本稿では論旨展開の明快を期すために、考察の対象を両物語の「母親」に限定したことを了解されたい。

なお、引用文の最後に挙げられている *Une Grand Mère* (プレイヤード版ではアポストロフではなくハイフンとなっている。Cf. *Contre Sainte-Beuve*, p.545 sq.) は、ブルーストの友人ロベール・ド・フレールの祖母の死を悼んで綴られた文だが、この1907年というのは、後述するように、フランソワーズ解釈にとって決定的な意味を持つ年である。その年に「ジャン・サントゥイユ」の単一の母親が「失われた時を求めて」の母親と祖母の二人物に分化する端緒が現れたとタディエが考えているのは非常に興味深い。

15) *Jean Santeuil*, p.224.

16) *Ibid.*, p.235.

17) *Ibid.*, pp.416-416.

18) 当時のブルーストと両親の関係については、例えばペインター (George D. Painter, *Marcel Proust a biography*, Chatto & Windus, London, 1959 & 1965.) の次の箇

所を参照されたい。指示頁は岩崎力訳「マルセル・ブルースト — 伝記」（筑摩書房）1971による。上巻 306頁・311頁・319頁。

- 19) Dominique FERNANDEZ, *L'Arbre jusqu'aux racines*, Bernard Grasset, 1972. (岩崎力訳「木、その根まで — 精神分析と創造」, 朝日出版社, 1977, pp.307-308.)
- 20) Cf. Jean Santeuil, pp.202-211. & *Recherche*, I, pp.12-43.
- 21) *Recherche*, III, p.625.
- 22) *Ibid.*, III, p.646.
- 23) *Correspondance de Marcel Proust*, t. III, Plon, 1976, p.447.
- 24) *Ibid.*, t. IV, Plon, 1978, p.348.
- 25) たとえば、友人の祖母の死を悼む形式をとりながら、一般的と見せかけた考察のなかで、自分と母親のことを語っていると思われる *Une Grand-Mère* (注の 14)を参照),あるいは物語の中に例を求めれば、ヴァントゥイユ嬢のサディズム (注の 27)を参照のこと)。
- 26) « Sentiments filiaux d'un parricide » in *Contre Sainte-Beuve*, pp.158-159.
- 27) しかし現実のアンビヴァレンツな関係が作品の中では昇華されて、母親は「聖女」のようなイメージに描かれ、家族は善意の象徴として主人公を包みこむとはいっても、芸術の中でこそブルーストの思い通りに行われたそうした救済は、現実の世界にまでその恩寵を垂れることはなく、実際にはブルーストは生涯の終わりまで母親に対するアンビヴァレンツな関係を清算しえなかったのだった。ペインターはこの間の事情を次の様にのべている。「しかし、頭腦的サディズムというこの形は、ブルースト自身、母にたいして生前と同様その死後も長い間感じ続けた愛情と憎悪のアンビヴァランスの恒存の一要素であって、それはまた社会的地位の低い男たちと彼との同性愛関係にも見られ、あらゆる点で倒錯したスノビズムから、ブルーストは彼らと一緒に母の思い出を冒瀆しようとしたのだった。」(邦訳、下巻, p.66)「こうして凌辱にさらされる肖像のなかにはブルースト夫人のそれもまじっていた。ヴァントゥイユ嬢が女友達にけしかけて父の肖像を凌辱させるモンジュヴァンでの重要な場面は、ブルースト自身の生涯のなかで何度となく繰り返されたものであった。とはいえブルーストが、ヴァントゥイユ嬢と同じく(彼女はある時期自分の悪徳に身をゆだねるが、他の時期には父の思い出を大切にす),このおぞましい行為によって憎しみの徴候をあらわにみせただけでなく、傷つけられた愛の証しを長い年月にわたってみせていたこともたしかである。」(邦訳、下巻, p.272)
- 28) ペインター, 邦訳, 下巻, pp.71-72.
- 29) たとえば、前者に関しては「時」の問題、後者は「同性愛」が挙げられる。なお、フィリップ・コルブはブルーストと母親との書簡集への序文のなかで「母を相手になら、彼のもっとも内奥の考えを故意に伏せたり、人物や事物に対して彼が抱いている真摯な意見を述べるのにはばかられるものは何もないのである」(フィリップ・コルブ編「ブルースト・母との書簡」, 権寧訳, 紀伊國屋書店, 1974, 序文, p.10)と述べているが、ブルーストの同性愛を考えた場合に、コルブの見方は余りにも皮相的

で母子間の愛憎を無視したものと云わざるをえない。

- 30) *Recherche*, III, p.1034.
- 31) *Ibid.*, III, p.1033.
- 32) *Ibid.*, II, p.778.
- 33) これについては注の 14)および BARDECHE, *op.cit.*, t.1, p.342.を参照。
- 34) 尤も、一般的にいて「失われた時を求めて」では物語が展開するにつれて登場人物はますます「墮落」し状況はよりグロテスクになっていくのだが、フランソワーズもまた（物語の発端において既に孫さえあった彼女の、物語の終局における年齢のことは措くとしても）、ちょうどサン＝ルーと同じように（思えばサンタンドレ・デ・シャンの、フランソワーズは農民の、サン＝ルーは貴族の、ともに体現者なのであったが）その例を免れず、彼女は娘の卑俗な言葉遣いに感染してしまう。《Sa fille s'étant plainte d'elle à moi et m'ayant dit (je ne sais de qui elle l'avais reçu) : «Elle a toujours quelque chose à dire, que je ferme mal les portes, et patatipatali et patatatipatala», Françoise crut sans doute que son incomplète éducation seule l'avait jusqu'ici privée de ce bel usage. Et sur ces lèvres où j'avais vu fleurir jadis le français le plus pur j'entendis plusieurs fois par jour: «Et patatipatali et patatatipatala ». >  
(*Recherche*, III, p.749.)
- 35) *Recherche*, II, p.788.
- 36) *Ibid.*, II, pp.358-360.
- 37) *Ibid.*, III, p.154.
- 38) Cf. *Recherche*, III, pp.462-464.
- 39) *Recherche*, III, p.419.
- 40) *Ibid.*, III, p.748.
- 41) Céleste ALBARET, *Monsieur Proust*, Robert Laffont, 1973. 三輪秀彦訳「ムッシュー・ブルースト」, 早川書房, 1977, p.166.
- 42) ベインター, 邦訳, 上巻, p.13.
- 43) ベインター, 邦訳, 上巻, p.306.